

輪廻

著／星見月夜

輪舞



1. 朝に舞う

朝の空気が、だんだんと温かみを帯びてくる。

灰色に濁った街が、灰色のまま朝を迎える。

私はそんな景色を他人事のように眺めて、足を踏み出した。

——何もない場所へと。

2. うそつき

小学校の頃を思い出してみる。

私はいつも、みんなを遠くから眺めていた。

体も小さくて、声も小さかった私。体

育の授業はいつも見学だったし、音楽の

授業では歌を唄えなくて怒られていた。それでも、友達はいた。友達だと思っていた子たちは、いた。

小学校二年生の出来事だったと思う。

帰りの会の前に、ひとりの友達が急に泣き出した。大きな、とても大きな声で。

廊下まで、隣のクラスまで聞こえるくらい、大きな泣き声。

みんながその子の机を取り囲んで、話を聞く。もちろん、私も。

「筆箱がない」と、その子はかすれた声で叫んだ。

先生が教室に入って来て、みんなから話を聞いて、筆箱を探すことになった。

その子はクラスの人気者で、先生にとってもお気に入りの生徒で。だから、みんな一生懸命探して——

筆箱は、すぐに見つかった。

私の、ロッカーの中から。

もちろん私は盗んでなんていないし、ロッカーの中なんて朝とお昼休みに見ただけ。私じゃないし、知らない。そう言えれば良かった。

でも、たったそれだけのことが言えなかった。

クラスのみんなが酷い言葉をぶつけてくる。剥き出しの嫌悪感と、暴力にも似た視線。先生ですら、私の話を聞こうとはしなかった。ただ、「謝りなさい」と怒鳴るだけだった。

涙がぼろぼろとこぼれて、声が出せなくて、私は目を擦りながら首を横に振った。何度も何度も横に振った。

私じゃないのに。私は、本当に、知らないのに。

私は嘔吐きだと罵られながら、心の外だけで「違う違う」と繰り返していた。

先生は声を荒げる。「どうして謝れないの」と繰り返す。

嘘を吐くのと同じだと思った。謝るの

は簡単だけれど、私は何も悪いことなんてしていないのだから。

嘘でも謝った方が良いのだろうか。私が悪いと、自分に嘘を吐けば良いのだろうか。

先生は、そんな嘘で赦してくれるのだろうか。そう、言いたかった。

——言え、なかった。

放課後になっても泣き続ける私に、先生はこう言った。

「お母さんに来てもらいますよ」

まるで恐喝のような、言葉。

私はお母さんにまで嫌われるのが怖くて、先生の言う通りに頷き続けた。

そして、反省文を書かされた。

先生の口から出た言葉。私の言った覚えのない言葉。泣きながらノートに書いて、先生に見せた。先生は冷たい目で私を見て、ノートを見て、書き直せと言った。三回書き直して、やっと赦してもらえ

相変わらず私はひとりきりで、友達なんていなくて。誰にも話しかけてもらえないし、話しかけようとしてもしていなかった。

選んだ部活は、吹奏楽部だった。演奏をしていれば、しゃべらなくても済むから。

夏の匂いがしてきた頃に、私はトランペットを吹くことになった。

先輩は、同じトランペット担当の人だった。

秋の演奏会に向けての練習。夏休みは、ほとんど毎日のように学校の音楽室へ通った。

先輩はとても丁寧に教えてくれたし、決して怒らなかつた。それに、嘘を言わなかつた。

良く笑う彼と一緒に、私も少しだけ笑えるようになっていた。

開いた窓から風が入り込む日には、窓

た。先生に、赦してもらえた。

筆箱を失くして泣いていたのは、私の友達で。一生懸命探したのは、私のクラスのみんなで。

先生は、私ひとりを悪者にしただけで。どうして先生にまで赦してもらわなくてはいけなかつたのだろうか。

今でも、分らない。

学校帰りの道を歩きながら、私はまだ泣いていた。

私にとっての本当は、みんなにとって本当で。

私にとっての嘘は、みんなにとって本当で。私は嘘なんて言っていないのに、嘔吐き

何も言わなかつた私。言えなかつた私ももっともって、声に出せば良かったのだろうか。……結局は同じことのように思えた。より多くの言葉を使った分、

辺に立って並んでトランペットを吹いた。夕陽が眩しくて、暑くて、気持ち良かったことを覚えている。

夏休みが終わって、演奏会もそれなりの成績で終わって。だんだんと空に秋の色が混じり始めた頃。私は先輩のことが好きなのだ、気づいてしまった。

それは突然で、抑えることなんて出来なくて、どう言葉にして良いか分からなくて。

初めて、自分の気持ちを文字にしようと思った。

一週間かけて何度も書き直したラブレターを、一週間もバッグの中にしてしまった。渡す機会をずっと待っていた。

家に帰っても、先輩のことが頭から離れなかつた。眠る前には、いつも先輩の笑顔 pensando 思い出していた。

眠れない夜と、落ち着かない毎日と、溜め息。そんな日々がしばらく続いて――

もっと大きな嘔吐きにされるだけだと思つた。

口を開くのを止めようと思つた。嘘にされるくらいなら、何も言わなくても同じだと思つた。

本当のことなんて、言わない方がずっと良いと思つた。

もしも口を開くことがあるなら――

そのときは、みんなが本当だと思うことしか言わないと決めた。

私にとって、それがどんなに間違つた「嘘」であっても。

そして私には、友達がいなくなつた。ひとりも。

3. 好き

中学生になつた私は、部活に入った。望んだ訳じゃなく、強制だったから。

――
街路樹の葉が色を変えた頃、やっとその機会は訪れた。

部活が終わつた後の音楽室。その日、残つたのは先輩ひとりだった。

準備室で楽器の手入れをしていた先輩に、手紙を渡す。緊張して息が出来なかつた。声も出せなかつた。ただ、先輩の前に封筒を差し出しただけ。

指先が震えて、顔を上げられなくて。受け取ってもらいたいの、逃げてしまいたくて。

先輩はそんな私の手から、そつと封筒を受け取ってくれた。

大事そうにポケットにしまつてから、「返事は後で良いかな」と言ってくれた。顔を上げた私の目の前に、先輩の素敵な笑顔があつた。

私は何度も頷いて、逃げ出すように準備室を飛び出した。

家までの帰り道。目に映る景色が変わったような気がしていた。

胸の高鳴りは、家に着いても収まらなかった。

部活に行くと、先輩と逢う。他の人のことなんて、気にならなかった。ただ、先輩がいることだけしか頭になくて。返事をもらうのが待ち遠しくて。でも、怖くて。演奏を失敗してしまう日が、二日続いた。

三日目に、先輩は「ちょっと残って欲しい」と言ってくれた。

私は顔を上げられないまま、それでもしっかりと頷いた。

窓から差し込む夕陽で、音楽室はオレンジ色に染まっていた。

音楽室には、先輩と私の二人しかいなかった。部屋の隅に立つ先輩と、向かい合う私。

外からは、誰かの楽しそうな笑い声が聞こえていた。

先輩が口を開く。「良いよ。付き合おうか」と。

私は伏せていた顔を上げて、自然と浮かぶ笑顔を先輩に向けて――

彼の、歪んだ笑顔を目にした。私の笑顔も、凍りついた。

衝撃があって、痛みが遅れてやってきて、目の前が真っ暗になった。

唇が、痛かった。

唇が痛かった。先輩の歯が当たって、少し切れていた。血の味が、口の中に広がる。

「お前、誰でも寝るんだらう。他の子たちがそう言ってたよ」

下卑た笑みと、酷い言葉。嘘の言葉。

どれだけ考えても、答えは出そうもなかった。

どうして私に関係ない人の言葉で、私が決められなくてはならないのだろうか。

どうして先輩はあの後すぐに帰ってしまったのだろうか。

どうして、あんなに痛かったのだろうか。

授業は頭に入らなかったし、部活にも行く気にはならなかった。

放課後、私の下駄箱から靴がなくなっていた。

学校に行かない日が増えた。部活にはあれから一度も顔を出さなかった。

いつからか、私を見てひそひそと話す人たちが増えていた。担任の先生でさえ、おかしい目で私を見るようになっていた。

理由を知ったのは、机に書かれた落書きを見た日だった。

黒いペンでぐちゃぐちゃに書かれた落

私は違うと言いたかった。誰かを好きになったのも、キスをされたのも初めてだと言いたかった。

でも、先輩は弁解をさせてくれなかった。カズくで組み敷かれ、押し掛かれた。「誰でも寝るなら、俺にもさせるよな」

荒い吐息と、途切れ途切れの言葉。聞き取るだけで精一杯の言葉。

私はただ、考えていた。どうしてなのだろう、と。

どうして先輩は嘘を言ったのだろうか。先輩に嘘を教えた子は誰なのだろう。そして、その子はどうして先輩に嘘を言ったりしたのだろうか。

私はどうして、先輩に信じてもらえなかったのだろうか。

服が乱暴に剥ぎ取られ、体に痛みが走った。とても、とても痛かった。体が二つに裂けてしまうんじゃないかと思うくらいに、痛かった。

書きの中に、あの日先輩が言ったような言葉が並んでいた。「誰でも」と。

机の前で立ち尽くしていると、教室のあちこちから酷い言葉が向けられた。

私は雑巾を濡らして、一生懸命机を綺麗にした。先生は、そんな私を見て何も言わずにホームルームを始めた。

放課後、たくさんの女の子たちに囲まれていた。みんな、とても怖い顔をしていた。

校庭の隅の、石段の脇に連れ出されて、殴られた。

先輩に手を出したことが気に入らないと言った子がいた。誰か知らない人の名前を出して怒る子もいた。ただ笑って殴る子もいたし、醒めた目で私を見下ろす子もいた。

みんながみんな、私のことを嫌っているみたいだった。

何か言いなさいよ、と言われても、私

は何も言わなかった。言いたいことなんて、何もなかった。

誰かが助けに来てくれることもなく、女の子たちは日が暮れるまで私を殴り、蹴り続けた。代わる代わる、額に汗を浮かべながら。

気がつくど、私は公園にいた。辺りはもう真っ暗で、人の気配なんてなかった。

街灯の白い光が、水道の蛇口を照らしていた。捻って、水を出す。

顔ばかり殴られたせいで、立っているのも辛かった。吐きそうだったけれど、我慢した。流れる水は冷たくて、それでも顔を冷やすには足りなくて。

汚れた制服を見下ろして、傷だらけの手足を見下ろして――

泣けるかな、と思ったけれど、泣けなかった。

とても嫌な気持ちがあっただけだった。

熱にうなされながら、ベッドの中で考えていた。

先輩を好きになったことが、悪いことだったのかもしれない。だから私は先輩に乱暴をされて、みんなに酷いことをされたのかもしれない。

誰も好きにならなければ良いのかもしれない。好きになっても、近くにいなければ良いのかも。

そんなことを思って、家のトイレで吐いた。涙が頬を伝って落ちた。

中学校の残りの期間、私はひとりきりで過ごして、卒業をした。

誰も好きにならなかったし、誰かと話した記憶もない。

それは、小学校の頃と同じだった。でも、もっと苦しかったと思う。

まぐれに話しかけてくる子もいたけれど、その誰もが私に下卑た目線を向けていた。その度に、私はあの日先輩に言われた言葉を思い出して、少しだけ嫌な気持ちになった。

人を好きにならなくても、誰とも話さなくても、嫌な気持ちにはなる。

そんなとき、私は夜の街に行くことを覚えた。

誰かに誘われた訳でもない。ただ、何となく明るかったから足を向けた、夜の街。

胸の高鳴りよりも、見知らぬ恐怖よりも、安心感があった。

街には私のような行き場のない人がたくさんいるように感じられた。そして、そんな人たちが時間を過ごす場所もたくさんあった。

ホール、クラブ、カラオケボックス、ネットカフェ、ゲームセンター、ファミ

冬のある日のこと。寒くて寒くて、震えの止まらなかつた夜のこと。

カーテンの隙間から外を眺めると、妙に明るかった。

雪が、積もっていた。見慣れた景色は白に覆われ、平坦になっていた。

コートを着て、手袋をして、ニットの帽子を被って、靴下を二重に履いて、外に出た。

音のない夜。風のない夜。誰もいない、止まったような夜。

何も考えず、歩き続けた。私ひとり分の足音だけが、私に聞こえていた。

誰かに呼ばれた気がして、振り返る。誰もいなかった。でも、足跡が残っていた。

真白な雪に点々と、私が歩いてきた跡が残されていた。

私は目を閉じて、深呼吸をして、部屋



に戻ることにした。

部屋の窓から外を見ると、雪の上に足跡が残っていた。

嫌な気分だった。

5. 夜の街

どうして高校に進学したのか、私には分からなかった。お母さんが何かを言った記憶があるから、それでだと思う。

とにかく私は名目上、高校生になっていた。

もちろん、学校にはほとんど通わなかった。

家にいるとお母さんが、冷たい目と冷たい言葉で私を責める。どこかで聞いたような単語を並べ立てて、私を追い詰めるようにする。優しい言葉なんてくれない。学校に行っても、私はひとりきり。気

ときどき、薬をくれる男の人もいた。後腐れがないように、と。確かに、それは大切なことだった。私の中に他の人間が出来るなんて、考えたくもなかった。私の中から他の人間が出て行くなんて、考えるだけで苦しくなった。

言う通りに振舞う私に、時々酷いことをする人もいた。何人かに囲まれるようなこともあった。けれど、私は逃げなかつたし、何も言わなかった。

まるでマネキンのようだ、と言われたこともあった。気味が悪いと逃げ出す人もいた。悪人のような格好や仕事の人ほど、私から逃げ出すことが多かった。

弱いな、と思った。それと、とても憐れにも見えた。去り際に言い残す言葉は、子供の言い訳にしか聞こえなかった。

ライブハウスの隅の席。いつも決まっていた座っていた席。そこに誰も近寄らなくなった頃、私は家に帰ることにした。

夜の内に家に帰って、自分の部屋に入る。

見知らぬ人の部屋のような感じがして、落ち着かなかつた。埃の匂いと、動かなかつた空気の匂い。脱ぎ捨てた服は、床にだらしく広がった。

自然と訪れた朝。目覚めて、高校の制服を着て、居間に行く。両親が私に向けて視線は、忘れられない。汚物に触れてしまった手を見るような、嫌悪と諦観の混ぜこぜになった視線。

学校に行く。それだけ言うと、私は家を出た。真新しいまま埃を被っていた鞆に、一度も開いたことのない教科書を詰めて。

高校には迷わずに行けたし、自分のクラスもちゃんと知っていた。それらしい席に座ってぼんやりとしていると、ホームルームが始まった。担任の先生は、男の先生だった。

鞆を置き忘れていたことに気付いたのは、家に着いてからだだった。

制服を脱いで、ハンガーにかける。あまり服の入っていないクローゼットに、しまう。出来るだけ大きなバッグを探して、私は服を詰め込んだ。

その日、玄関を出るときに「いつてきまず」を言わなかった。

だからなのかもしれない。家に戻らなかつたのは。

そして、その日が両親の顔を見た最後の日だった。

6. 怖いもの

結局私は、いつものライブハウスに戻っていた。

ホームルームが終わると、生徒指導室

に連れて行かれた。私はいつものように、逃げなかった。

圧迫感のある、落ち着かない部屋だった。壁一面に書棚があるのに、中身はほとんど空で。窓はあるのに、カーテンは閉まったままだった。ここなら、いつも連れて行かれる薄暗い部屋の方がずっと落ち着けると思った。

私を椅子に座らせると、先生は何かを言い始めた。言いながら、ちらちらと私を見ている。私の目でなく、体を見ている。きっと、誰かから噂話でも聞いたのだろう。どういう噂かはどうでも良い。ただ、先生でさえその噂を信じている。私以外の人間が語った、私のことを。

どうでも良いことばかりなんだと思つた。溜め息も出なかつた。

頷くだけを繰り返していると、チャイムが鳴って開放された。教室には戻らず、そのまま学校から帰った。

知らない相手に話して伝えようとしている、そんな人たちの姿。

外国で迷子になったらこんな気持ちになるのだろうか。そんなことを考えながら、時間が過ぎるのをただ待っていた。

そんな日がしばらく続いても、私の感覚は鈍くなってくれなかつた。

まるで時間が止まっているように、同じ苦しみが同じだけ思い出された。

ある女の子が声をかけてきたのは、そろそろ違う店に流れようかと思ひ始めた頃だった。

かわいい女の子だった。少し派手目な化粧と、ブランド物のコピーのハンドバッグ。薄くて小さい服と、短いスカート。髪の毛は色を抜いてあるらしく、焦げた卵焼きみたいな色をしていた。

テーブルの反対側に座って、甲高い声

であれこれと話しかけてくる。このライブハウスで女の子に声をかけられたのは、初めてだった。

それなりの会話と、それなりの話題。私が相槌を打つだけで、彼女はとても嬉しそうにはしゃいでいた。

私がいつもここにいると言うと、彼女は私の腕をつかんで、強引に席から立たせた。そして、店の外に連れ出した。どうしたら良いのか分からないまま、その子に引かれるままに夜の街を歩いた。

ゲームセンターでぬいぐるみを取り、カラオケボックスでお酒を飲んで唄って。自販機の前に座って、内容のない会話をする。

考えてみれば、彼女のやり方が当たり前だったのかもしれない。夜の街に逃げ込むより、夜の街で楽しむ方が正しかったのかもしれない。でも、私にはそんなことなんて思いつきもしなくて。時々無邪気に抱きついてくる彼女に、その視線

に、疑問すら抱かなかった。

日付が変わって、いつもなら適当な場所まで朝まで眠る時間。彼女は、私をホテルに連れて行った。女の子同士でも入れるのを知らなかった私は、新鮮な気持ちで部屋に入った。かき慣れた匂いと、見慣れた光景。薄いシーツと、硬いカーベツト。

彼女は手馴れた手つきで有線をつける。流れてきた曲は、聴いたことのある曲だった。

中学校の頃、トランペットで吹いたことのある曲。一昔前の流行歌。ベッドの縁に座って、その曲を聴く。今の私はどう思うんだろう。そんなことを考えてみたけれど、何も思わなかったし、感じなかった。ただ聴いたことのある曲というだけだった。

先にシャワーを使って良いと言われたので、バスルームに行った。シャワーで

駆け出して、バスルームに逃げ込んだ。

鍵を閉めて、肩を抱く。何だったんだろう。何が起きたんだろう。汗は流れ続け、奥歯はかたかたと音を鳴らしていた。

少女が扉を叩く。ガラス戸の向こうで叫ぶ。結露したガラス越しの表情は、今まで見たどんな人より醜かった。醜くて、恐ろしいと思った。

どうやって逃げ出したのか覚えていない。気がつけば、私はコインロッカーの前にいた。ちゃんと、服を着て。

それから私は、あのライブハウスに行くのを止めた。

居場所がひとつ減ってしまったけれど、あの恐怖だけはもう嫌だと思ったから。

本当に怖いものが何なのか、少しだけ分かった気がしたから。

髪についた煙草の匂いを洗い落とす。肌

にまで沁み込みそうな下水の匂いを洗い落とす。歯を磨いて、ドライヤーで髪を乾かした。背中まで伸びてしまった髪の毛。そろそろ切っても良いかもしれない

と思いつながら、バスルームに袖を通した。

バスルームのままベッドに横になる。彼女は何かを言っていて、バスルームに。音楽は、最近の流行歌に変わっていた。

かき慣れた匂い。見慣れた光景。薄いシーツと、硬いカーベツト。

どうしてだろう。私は、こんな薄暗い部屋でとても落ち着くようになっていた。湿っぽいベッドに横になるだけで、意識がだんだんとぼやけて行く。

このまま眠ろう。そう思って目を閉じると、シャワーの音が途切れた。先に眠ってしまったって、彼女は怒るだろうか。そんなことを考えて、深く息を吐いた。

朝までの時間が、切り取られる。

7. 恋人

居場所を失くした私は、駅前のベンチに座っていた。何も考えられないまま、人込みを眺めていた。

荷物はまだ、コインロッカーの中。時々バッグを持ち出して、コインランドリーで服を洗って乾かす。それから、またバッグに入れてコインロッカーにしまう。食事はファーストフードで済ませていた。寝る場所は、カラオケボックスが多かったと思う。

お金は充分にあった。私と夜を過ごした男の人たちは、それなりのお金を置いて行ってくれたから。

そんなとき、スーツ姿の男の人に声をかけられた。

私よりもずっと年上の、小太りの人だった。

手を引かれるままに部屋に連れて行か

れた。いつものような薄暗い部屋じゃなく、その人が生活している部屋。きちんと掃除された、空気の澄んでいない部屋。男の人はコーヒ―を淹れてくれた。それから、幾つかの質問。

答えられないことは何もなかった。私はどういう生い立ちなのか、両親はどこに住んでいるのか、今までどうやって生活していたのか。問われるままに答えた。

大きな溜め息を吐いた男の人は、「しばらくここに居て良い」と言った。

だから私は、しばらくこの部屋にいることにした。断る理由もなかったから。

次の日の夕方、男の人は両手に大きな買い物袋を提げて帰って来た。中身はたくさんの食材だった。

その次の日は、服を買って来た。男がひとりで購入するのは恥ずかしかったと、頬を赤くしていた。

その次の日は、布団。その次の日は、せそような表情で、私の元まで駆け寄って来てくれた。

「髪の毛、切ったんだね」

そう言いながら、彼の手が私の耳元まで伸びた。

「こんな耳の形だったんだ」

何故か楽しそうにそう言った彼の指先が、私の耳にそっと触れた。

嬉しかった。私に触れてくれることが、嬉しかった。嬉しくて嬉しくて、私は泣いてしまった。

慌てて謝る彼に、私は首を何度も振ることしか出来なかった。「ありがとう」の一言も、言えなかった。

その夜、私は初めて彼に抱かれた。幸せだと思った。とても気持ち良いと思っただ。初めての気持ち、たくさん与えてもらった。

誰かの腕に抱かれて眠る幸せを、初めて知った。

文庫本を何冊か。

私は買い与えられた服を着て文庫本を読みながら、キッチンで簡単な料理をして一日を過ごしていた。夕食は、男の人が作ったものを二人で食べた。

ベランダに、二人分の洗濯物を干す。二人分の布団を干して、部屋に掃除機をかける。食器を洗って、お米を研いで、文庫本を開く。

そんな日がどれくらい続いたのだろう。鏡に映る私の姿は、少し変わってきていた。頬は桜色だったし、髪は艶やかに潤って見えた。

髪を切ろうと思って、部屋を出た。与えられたスベアキーで部屋に鍵をかけて、街に出る。こうして部屋を出るのは、コインロッカーにバッグを取りに出た日以來だった。

風がとても強くて、道端ではのぼりの昼間は家事をして過ごし、夜は彼の隣で眠る。

夜は眠る時間なのだと、やっと分かった気がした。

季節が変わって、枯れ葉が道の隅に集まる頃。生理が来なくなっていた。妊娠検査薬は、陽性。産婦人科に行く

と、七週目だと言われた。本当に、嬉しかった。私の中に、他の人間が出来た。これは、誰かと繋がった証なんだと思った。

病院からの帰り道。初めて胸を張って道を歩くことが出来た。しっかりと、前を見て。

その日、彼に妊娠したことを話した。誇らしかった。嬉しかった。幸せだった。そう、気がつけば私は、目の前にいるこの人のことが大好きになっていた。離れたくないと思うほどに、深く。

巻きついたボールが大きく傾いでいた。

適当な美容室で、髪を切ってもらった。今までで一番短く切ってもらった。風が強いから、短い方が良いと思ったから。

美容室を出て、外の景色に触れる。日差しは傾いて、そろそろ夕暮れの手前にさしかかっていた。

何となく、私の足は駅へと向けられた。駅前の、ベンチに向けられた。

電車から降りてきた人たちが改札を抜け、階段を下りて私の前を通り過ぎて行く。

ベンチの前に立って、人の流れを見詰めていた。

しばらくそうしていると、名前を呼ばれた。声のした方を見ると、彼だった。

私に服を買い与えてくれた人。私に本を買い与えてくれた人。私に食事を作ってくれた人。

私に、居場所を作ってくれた人。

彼は満面の笑みを浮かべて、本当に幸

けれど――

彼は、そうは思っていなかった。

激しく怒鳴られた。鬼のような形相で睨まれた。頬を強く打たれた。

何が起きたのか分からないまま、どうして良いのか分からないまま、私は彼の言葉をちゃんと聞いていた。

彼の言葉は、とても酷い言葉ばかりだった。体がこわばって、動けなかった。動けずにいると、殴られた。痛みで体を丸めると、蹴りつけられた。何度も、何度も。

「ちゃんと墮ろしてこい」
その一言で、全身から力が抜けていった。

減茶苦茶になった部屋の真ん中で、彼は拳を握って立っていた。一生懸命作った特別な夕食は、一口も食べべられずにかーベットの上に散らばっていた。彼はその上に、何枚かのお札を無造作に放り

投げて――

もう一度私を蹴って、部屋を出て行ってしまった。

墮胎手術は、すぐに終わった。頬に残った痣を見て先生は眉をひそめたけれど、何も言わなかった。支払ったお金は、彼が放り投げたものをちゃんと使った。

部屋に戻って、しみの残っているカーペットに座り込む。お腹に手を添えて、目を閉じる。もう、ここには誰もいない。誰かと繋がったはずなのに、消えてしまった。消してしまっただ。

哀しかった。あんなに幸せだったのに。あんなに気持ち良かったのに。あんなに、満たされていたのに。結局私は、自分を傷つけることしか出来なかった。誰かに、傷つけられることしか出来なかった。哀しくて、哀しくて、泣いた。声を出して、泣いた。



彼の手が私の肩を掴む。壁に背中を押し付けられ、厳しい視線で見下ろされる。

「あまり面倒なことをさせるな」

それだけ言い残して、彼は部屋を出て行った。多分、仕事に出て行ったのだろう。

その場に崩れ落ちて、私は考えていた。何が面倒だったのだろうか、と。部屋を減茶苦茶にすることだろうか。料理を台無しにすることだろうか。私を傷だらけにすることだろうか。財布の中から何枚かの紙幣を取り出すことだろうか。

分からなかった。分からないから、私も面倒になった。考えるのが、面倒になってしまった。

彼は毎日のように暴力を振るう。私は逆らわない。ときどき病院に行って、階段から落ちたと嘘を吐いて治療を受けた。

彼は毎日のように酷いことを言う。私は黙って聞いている。何かを思うのも考えるのも、面倒になっていた。

そしてまた、夜の街に逃げ込んだ。

体のあちこちが痛かった。通り過ぎる人は皆、私から目を逸らした。多分、酷い顔をしていたからだろうと思う。目は真赤に腫れていたし、頬には大きな痣がはっきりと残っていたから。

それでも夜の街は、変わっていなかった。変わらず、私を受け入れてくれた。

濁った空気。澱んだ空気。作り物の華やかさと、見せかけだけの充足感。

静かに夜を過ごしたくて、慣れないバーに足を踏み入れた。座った席は、一番隅の席。飲みきれないお酒を飲みながら、何も考えないように時間を過ごす。

日付が変わって、店内から人がだんだんと減って、閉店の時間までをそうやって過ごした。

朝になって、私はベンチに座っていた。寒かったけれど、気にならなかった。

食事は出来合いのものを並べるだけ。洗濯は一週間に一度だけ。掃除は言われたときにだけ。文庫本は、燃えるごみで出してしまった。

雪が降った。

いつかと同じように、街の起伏を曖昧にする雪だった。

喧騒を吸い込んで、汚れを覆い隠す雪。日が昇れば溶けて消えてしまう雪。

羨ましいと思った。

彼の帰りが遅かった日。お酒の匂いをさせながら帰って来た日。

いつものように、私は殴られた。口の中が切れて、胃の中の物を吐き出した。立っていられないくらい目眩がして、指先が痺れた。体中、全部が焼けただれたような感じだった。倒れ込んだ私を、彼が抱き上げる。き

コートを着た人たちが足早に過ぎ行き、駅の中に消えて行く。その様子を、どこか遠くに感じていた。

思い出すのは、子供の頃のことだった。冬の始まりのこんな寒い朝のこと。吐く息が白い塊になって空に消えるのが面白くて、はしゃいで歩いたこと。空は青くて、青いほどに澄み渡っていて、澄み渡るほどに寒さは増して。

目を閉じてその青さを思い出そうとしたけれど、思い出せなかった。ただ、こうして見上げている空よりは青かったような気がしていた。

部屋に戻ると、彼がスーツ姿のままベッドの縁に座っていた。

問われるままに答える。墮胎手術をしたこと。夜の街にいたこと。明け方からついさっきまで、駅前のベンチに座っていたこと。

つく、強く、しっかりと抱きしめた。

「一緒に死んでくれよ。もう俺たち、減茶苦茶だもんな」

そう言う彼の声は、震えていた。泣きながら、そう言っていた。

違う。そうじゃない。

彼の手を力一杯振り解いて、私は大きな声で「違う」と言った。奥歯をかみ締めて、彼を睨みつけた。

減茶苦茶にしたのは彼で、減茶苦茶にされたのは私で。彼と私は、別の人間で。「俺たち」なんて言われ方も、同意を求められない方も、認められなかった。言葉に出来ないまま、掌を握り締める。

「違う」

もう一度繰り返して、私は部屋を飛び出した。バッグだけを持って。

寒い、寒い夜だった。バッグを握る指先が凍ってしまうんじゃないかと思うくらいに、寒い夜だった。

駅の構内で缶コーヒーを飲みながら、夜が明けるのを待った。始発の電車で、どこか遠くへ行こう。そう決めて待った。

それと、もう「面倒だから」とそのままにしておくのを止めようと決めた。目を逸らすのを止めようと決めた。

すぐに生き方を変えることは出来ないかもしれない。でも、場所を変えることは出来る。簡単に。たくさんの苦しみも、その前に感じていた喜びも、全部忘れようと決めた。

夜が白んで、寒さが一番体に染みる時間。たくさんのものが見えるようになる時間。一番初めに、あの人と交わした会話を思い出ししていた。

「夜が好きなの？」

「昼間が嫌いだけ」

「どうして？」

「余計なものまで見えるから」

あの人が笑う。

ほどでもない。特徴なんてほとんどないような、そんな街。

部屋はその日の内に見つけることが出来た。保証人も書類もいらなかった。線路沿いにある路地を一本曲がった辺りにある、狭くて汚いアパート。明日取り壊しますと言われても違和感がなくらい、打ち捨てられている建物だった。

コインロッカーから持ってきたバッグを部屋の隅に置く。わずかに差し込む夕日が、舞い上がった埃を照らしていた。まずは掃除から始めよう。それから、布団と小さなテーブルを買って……。

あれこれと考えている内に、胸が沸き立つ感じがしてきた。

ここから私は、始めるんだ。そんな前向きなことを思って、埃っぽい空気を吸い込む。

もう絶対、「面倒臭い」なんて思わない。それだけは、しっかりと自分に言い聞かせて。

「夜は、必要なものだって見えなくなっちゃうよ？」

私は黙っていた。言いたかったことがあった。

あの人の言ったことは確かに正しかったけれど――

それは、昼に生きてきた人の言葉。たくさんのものがはつきりと見える時間を過ごしてきた人のための、正論だと思った。

だから私は言いたかったことを黙って飲み込んだ。

「本当に大切なものは、きっと夜でも見えるのに」

8. 風の強い街

電車の窓から見える景色が、見知らぬ景色に変わる。小さく聞こえる車内の話

商店街の外れにある弁当屋で働くことが決まった。古くからこの街にあるお店らしくて、小さい割りに忙しいという細かいことを聞かず、問わず、雇ってくれた。

特徴なんてほとんどないような街。でも、私を受け入れてくれた街。

毎日はただ忙しく過ぎて、狭い部屋には少しずつ物が増えていった。

ときどき、男のお客さんから声をかけられることもあった。でもそれは、お愛想のようなもの。嫌味のない、明るい冗談。誘いはしっかりと断って、傷つけないように笑う。相手も、笑い返してくれる。作り笑いでも、愛想笑いでも、気分が軽くなる。そんな簡単なことを初めて知った。

お店の人たちとも笑って会話する。冗談を交えながら。そんな当たり前のことを、私はやっと出来るようになっていた。

し声に、耳慣れない方言が混じり始めた。網棚からバッグを下ろして、電車を降りる。

知らない名前の駅。来たことのない場所。違う景色と、初めての空気。たった半日電車に揺られるだけで、こうして場所を変えることが出来た。どうしてもっと早くこうしなかったのだらうかと、疑問にすら思った。

改札を抜けて、辺りを見回す。狭いロウタリーと、閑散とした駅前通り。天気は良かったけれど、風も強かった。

荷物をコインロッカーに入れて、歩き出す。

少し暑く感じたけれど、風が強いのでコートは脱げない。どっちつかずの季節。最初に私が探したのは、お昼を食べる場所だった。

それほど大きな街じゃなかった。田舎というほどでもないけれど、都会という

大丈夫。きっと大丈夫だ。私は、ここでならちゃんと生きていける。

狭くて古い部屋から埃とカビの匂いが消えた頃、そんな風に思えるようになっていた。

長い雨が上がって、昼の日差しが強くなった頃のこと。

同じお店に勤める女の子から、海へ行こうと誘われた。車に乗って、何人かでもちろん、日帰りです。

私は少し悩んだけれど、付き合うことにした。もう何年も海を見ていない気がしたし、たまには違う場所を見てみるのも良いかなと思ったから。

それと、こういうちゃんとしたお誘いは初めてで――
本当に、嬉しかったから。

レンタカーを借りて、高速道路で海まで。

初めて逢う人ばかりだったけれど、全

く嫌な感じはしなかった。私の目をちゃんと見て、真っ直ぐに話してくれる人たち。些細な気遣いが、何だかくすぐったかった。

海について、水着に着替える。

目の前が真っ白になってしまいそうなくらい、強い日差し。久し振りに踏みしめる砂浜は歩きづらかったけれど、とても心地良かった。

パラソルの下で、良く冷えた缶ジュースを飲みながら、海辺を眺めていた。

たくさんの人がいる。私のことを知らない、私と関係を持っていない人。でも、今はこうして同じ砂浜にいる人たち。声も交わさない。視線も合わせない。でも、同じ場所について、同じ空気を吸っている人。

不思議な感じだった。まるで、世界が急に広がったような感じだった。

ぼんやりとしている私に、同僚の子が心配そうに声をかけてくる。私は少し微

笑んで、「何でもないよ」と返した。それは嘘だけど、罪悪感のない嘘だった。

空を見上げる。白く霞んで、眩しい空。

記憶の中にある青空よりも、ずっと淡い青空。

同僚の子に、何の気なしにその話をする。昔はもっと空が青かった気がした。そうすると、彼女はこう答えた。

「それ、子供だったからだと思うよ」

子供だったから。子供だったから、空は青いものだど無意識に刷り込まれていたのだろうか。それとも、子供だと空が真っ青に見えるのだろうか。この時この砂浜で遊んでいる子供たちが見る空は、私と違う色で見えるのだろうか。

分からなかったけれど、彼女の言う通りだと思った。

空は変わらなくても、私は変わってしまう。大人になってしまう。

でもそれは、多分寂しいことじゃなくて――

がら、挨拶を交わす。大丈夫。この人は私を傷つけれたりしない。自分にそう言い聞かせて。

朝、仕事に出るときにいつも顔を合わせるようになった。どうも時間が重なるらしい。おはようございますの挨拶を交わして、一日が始まる。

夕方、私が買い物に出かける時間になると、丁度帰ってくる。おかえりなさいの挨拶を交わして、一日が終わりに向かう。

短い会話の積み重ねと、そんな毎日の積み重ね。少しずつ、お互いのことが見えてくる。私と歳が同じだということ。恋人がいて、今は遠くに離れていること。料理が得意で、車の運転が苦手だということ。朝は弱いらしく、「行き会わなかったら部屋の呼び鈴を鳴らしてくれると助かる」と笑っていた。

何度目かの、「大丈夫」。自分にそう言い聞かせる。普通に近所付き合いが出来

在るがままに、そのままに、目の前の全てを受け入れられるようになること。そう、なれたこと。それが、嬉しかった。

一年。

短いようで長かった一年が過ぎて、私は部屋を越すことになった。勤めているお店の店長さんが、「女の子の人がひとり暮らしする部屋じゃないよ」と言って、知り合いのアパートを借りてくれた。社員寮という名目で、家賃の一部を負担してもらって。

正直、そこまでしてもらうのも気が引けたけれど、店長さんの厚意に甘えることにした。例えただの従業員としてだけでも、大切にされている。そんな感じが嬉しかったから。受けた恩は真面目に仕事をして、ちゃんと返そう。そんなことも思っ

新しい部屋は、国道から少し入った場所にあった。大きな用水路の脇にある、



水色のアパート。車がないと不便なこの街で、車で出入りするには不便なアパート。おかげで人気がないんだよと、大家さんが苦笑していた。

引越しが終わって、荷解きも済んで、隣室の人に挨拶をして。新しい部屋で、ゆっくりと眠った。

自転車を一台買った。通り過ぎる人と自然に挨拶が出来るようになった。お店に来るお客さんとも、仲良く話が出来るようになった。

この街で過ごす二度目の夏が、そうやって過ぎて行った。

空が高くなって、空気がゆっくと透き通り始めた頃。午後になると決まって風が強くなり始める季節。隣の部屋の人が別の場所に越して行った。

代わりになるように越して来たのは、男の人だった。

無意識で身構えてしまう自分を抑えな

ている。何も警戒することはない。

ちゃんと恋人がいるというの、大丈夫だと思理由のひとつだったように思う。

そろそろ秋も終わり、冬が始まるようにしている頃。

夕暮れの冷え込みで、手がかじかんでしまった日のことだった。私はいつものように、部屋でひとり分の夕食を作っていた。そろそろマフラートと手袋が必要な季節だな、と思いながら。

突然、隣の部屋から大きな声が聞こえてきた。隣の、毎朝顔を合わせている男の人の部屋からだ。聞こえた声は、女の人の声だった。

怒鳴り声は途切れ途切れに続いていた。女の人の声。それは多分、遠距離恋愛をしているという恋人の声だったのだろうと思う。

足元が落ち着かなくなる気持ちと、何

故だか速まる鼓動と。聞き耳を立てるのは良くないと思いつつ、どうしても意識から外せなかつた。

激しくドアを叩きつける音がした。それと駆けて行く足音が。足音は、ひとり分だった。隣の部屋から聞こえていた物音は、それっきり凍ったように止んでいた。

私は心配になって、震える掌を押さえながら部屋を出た。

ドアは勢い余つたらしく、少し開いていた。そっと手を添えて、顔だけで中を覗く。きちんと整理された部屋の真ん中で、肩を落として立っている人。声をかけても、顔を上げない。見ると、大粒の涙を流していた。

何があつたのか分からないけれど、どうなつたのかは分かるつもりだった。でも、それを確かめるほど私は残酷じゃない。扉を閉めて、部屋を出よう。きつと明日になれば、笑顔で挨拶を交わせる。

室の彼とは毎日のように互いの部屋を行き来していた。仕事から帰ると一緒に夕食を食べ、お風呂に入り、体を重ねて、同じベッドで朝まで眠る。朝はそれぞれの部屋で身支度を整えて、出勤。今まではようだった挨拶が、いつてらっしやいに変つた。

彼は自分のことを話してくれる。私も彼のことを知リたかつたし、そうして話してくれることがとても嬉しかつた。

でも、どうしてだろう。自分のことを話すことは出来なかつた。相槌を打つだけの会話と、問いかけるだけの会話。問われたことにだけ、曖昧に答える会話。自分のことを話すのは、とても怖いことなのだとやつと分かつた。それでも彼はちゃんと話してくれる。そんな彼を本当に好きになるまで、それほど時間はかからなかつた。

そう思つて、ドアから離れようとした。

ドアから、離れるつもりだった。でも、私の足はそこから離れなかつた。

私の目は、彼の背中をじつと見つめていた。声を殺して泣き続けている、彼の姿を見つけていた。

気がつけば足は部屋の中に向いていた。気がつけば彼の隣に立っていた。気がつけば、彼を抱きしめていた。

こんな気持ちは初めてだった。誰かを抱きしめてあげたいと思う、こんな気持ち。それが誤魔化しても、今だけは目を逸らされてあげたいと思つていた。抱きしめた私の腕に、彼がすがりつく。

体を合わせることで、重ねることで、こんなにも暖かくなれる。遠回りをしたけれど、私はやつと気づくことが出来た。

遅くなつてしまつた夕食を、私の部屋と一緒に食べた。メニューは今でも思い出せる。シチューとパンとサラダ。ひと

お弁当屋さんには相変わらず忙しくて、でも仕事は楽しくて。一緒に仕事をするみんなが、私のことを明るくなつたねと言つてくれて。

彼のために食事を作つて、洗濯をして、家事をして。二人の休みが重なつた日には、彼の車で出かけて。

長い日々だった。一秒一秒がゆっくりと進むような日々。時間が過ぎてゆくのを、しっかりと噛み締めることの出来る日々。

そうやつて、春が訪れた。

用水路沿いには桜の木が植えてあつた。春になれば、桜は花を咲かせる。流れる水面に桜が映る。落ちた花びらが、水路を流れる。

私たちはアパートの窓からそんな様子を並んで眺めていた。この時期のためだけにここに住んでも良いかもしれない。そんな風に思えるほど、満たされた時

り分を何とか二人分にした、簡単なメニュー。揃いのお皿なんてなかつたから、在り合せのお皿で。

食事の間、私たちは無言だった。暖房の音と、換気扇の回る音。それと食器の触れ合う音以外は全くの無音だった。でも、雰囲気は重苦しくなくて――

お互いに、照れ臭かつただけで。

私は恥ずかしくて、目を合わせることも出来なかつた。

食事を済ませると、彼は一度自分の部屋に戻つてから、また私の部屋を訪れた。彼女と別れることになつた、と簡単に告げて、その後で私に付き合つて欲しいと言つてくれた。

「何だか尻軽みたいでみつももないんだけど」

そうやつて、恥ずかしそうに。

冬になつて、コートとマフラーと手袋をして部屋から出る日々が始まつた。隣

間。飲みなれないお酒でぼんやりとして、じつと桜を見つめる。

彼が不意に立ち上がり、窓から身を乗り出して視線を上げる。いたずらをする子供のような目で私を手招きする。

夜空は澄み渡つていて、そこには半分が月が浮かんでいた。花見と月見を同時に出来るなんて贅沢だね、と彼が笑う。

街灯でなく、月明かりに照らされる夜桜。桜が散るまで、私たちはほとんど毎晩のようにそうして過ごしていた。

桜が散つて、青々とした葉が生い茂る頃。

彼が私に結婚を申し込んできた。高きうな指輪と、真剣な言葉で。

嬉しくて、本当に嬉しくて、自然と涙が溢れた。でも、同じくらい怖くもあつた。今までのことを思い出す。この歳になるまでに歩んできた日々を思い出す。彼と一緒に居たい。でも、怖い。

怖くて、嬉しくて——
私は、自分自身のことを全部話そうと決めた。

嘘じゃない、本当のことを。

夜は長くて、私のことを全部話してしまふには十分な時間があつて。

めちゃくちゃにされたこと。めちゃくちゃにしてしまったこと。逃げ出したこと。逃げ出すしかなかったこと。全部を話した。

彼は黙ったまま、私の話を聞いていた。聞いて、聞き終わっても黙っていた。彼の顔は見れなかったけれど、雰囲気で分かった。きつと、凍りついたような表情をしている。

私は泣いていた。涙がこぼれ続けた。彼は立ち上がって、部屋を出て行った。気持ちを整理させて欲しいとだけ言つて。

彼のいなくなった部屋。私ひとり取り

慢する。電車は揺れながら、私をゆっくりと運ぶ。

しばらく経って目を開くと、見慣れた景色だった。コンクリートの建物が隙間なく立ち並ぶ景色。灰色の空の色と、澱んだ空気。怒っているかのように歩く人たちと、急かすようなアナウンス。

肩から力が抜けて、無意識に席から立ち上がった。

また、逃げ込むようにして、夜の訪れを待つことにした。

9. 違う夜

初めて訪れた街。でも、どこか似たような街。昼間は湿気っぽい風が肌に纏わりつく。夜は原色の照明で路地が彩られる。混乱し続けているような喧騒の途切れない街。

残された部屋。時計の針が動く音が妙に大きく聞こえる部屋。その中で私の涙は止まった。

彼と一緒にになりたい。結婚をして、子供を産んで、育てて、年老いて死にたい。本心からそう思った。

でも、彼は今ここにいない。戻って来るとも思えない。

テーブルの上には、指輪の入ったケースが所在無く置かれていた。

二時間。私はそのままじっとしていた。何も考えられなかった。でも、もうどうすべきなのかは分かっていたし、決めた。いた。

真夜中に、荷物をまとめる。大きめなバッグに一つ分だけの荷物を。そしてそのまま、部屋を出た。

明け方の空気をゆっくりと吸い込む。

いつもなら清々しいはずの朝の空気。一

コインロッカーに荷物を入れると、いつかどこかで同じことをしていたような感覚に捕らわれた。既視感。

それは当たり前前の感覚なのだろう。場所と時間が違っても、前にも似たようなことを繰り返していたのだから。

駅の化粧室でメイクをして、夜の街に足を踏み入れた。

骨と肉を引き剥がそうとするような喧騒。足を照らすには弱々しい照明。呼吸をするのにも困るほどたくさんの人間。

世の中がどんなに変わって進んでしまったとしても、こういう場所だけは変わらないんじゃないかと思った。

カウンター席に座って、ゆっくりと時間を過ごす。安らぎなんてない。痛みもない。でも、他に行くべき場所が見当たらない。

ずっとひとり生きて行くことも出来なかった。誰かを欲しくなって、誰かに

日が始まる空気も、その日は違った。埃とカビと下水の匂い。いつか吸い込んだ、澱んだ空気の匂い。それが、どこからか流れて来て——

結局、私はどこにも行けなかったのだと、思い知らされてしまった。

始発に乗って、街を離れる。特徴なんてほとんどないと思っていた街を離れる。記憶の中を探れば、いくらでも思い出すことは出来た。でも、思い出さないことにした。埃の舞う部屋に足を踏み入れたときの気持ちも、泣いていた彼の背中も、二人で並んで見つめた桜も。

じつと目を閉じて、殻に閉じこもるようにして、電車に揺られる。居場所を変えたつもりだった。変えられたと思っていた。自分も変われたと思っていた。でも、それも勘違いでしかなかった。

思い出そうとする自分を、抑える。我

与えなくなつて、そしてまたひとりに戻ってしまった。後悔じゃないけれど、それにとでも良く似た気持ちだった。

昔とは少し変わったこと。声をかけてくる男の人が減ったこと。確かに私は歳をとっていたし、他の若い子に比べるとピント外れの服装をしていた。声をかけられ、連れ添って席を立つ女の子たち。そんな姿を見る度に、妙な気持ちになった。声をかけて留めてしまいたくなることさえあった。

でも、そんな私にも声をかけてくる男の人はちゃんとして、流されるように、湿気っぽいシャツに包まれている自分がい

一晚だけ、私の隣にいる人。一晚経てば赤の他人に戻る人。そんなことばかりを繰り返していた。

気がつけば、肌を焦がされるような真夏も過ぎ去っていった。

どこでおかしくなったのだろう。そんなことを考える日が多くなった。カウンター席にも慣れてしまったし、

お酒の味にも慣れてしまった。毎日少量くない量のお酒を飲んで、思考を鈍らせる。考えるのが嫌だった。でも、他に考えることもなかった。考えたくないからお酒を飲んでしまう。その繰り返し。

何日か振りに、男の人に声をかけられた。年上の、聡明そうな男の人だった。

短い会話の後で、店を連れ出される手を引かれるようにして連れて行かれたのは、ホテルではなく落ち着いたレストランバーのような店だった。

私が黙って座っていると、その人はウェイターに幾つかの注文をした。まずはミネラルウォーター。それからサラダが出て、パスタと肉料理。男の人はコーヒーストを飲むだけ。私は半ば押し付けられるようにして並べられた料理を、時間をかけて全部食べた。



をかけて食べ終えた。コーヒートの強い香りで久し振りに意識がはつきりしたようだった。サラダにかかっていたドレッシングがおいしかった。

男の人が口を開く。私の名前を聞く。私は少し考えてから、自分の名前をちゃんと名乗った。名前を聞かれたのなんて何ヶ月か振りだったので、思い出すのに少し時間がかかってしまった。

男の人は伝票を取ると、机の上に何枚かの紙幣と、一枚のメモを置いて立ち上がった。

「今日の夜に、ここで待ち合わせよう」
そう言うと、さっさと立ち去ってしまった。不思議な口調だった。まるで、私が拒まないのを知っているような口調で、その割に自然な感じがした。

お金を残していった意味が少し分からなかった。私は久し振りに服を買い換えようと思ひ立ち、喫茶店を出た。そろそろ、コートが必要な季節になろうと

食事が済むと、また夜の街に。遠回りをしたけれど、やっとな場所に行く。そう思っていた。

けれど連れ込まれたのは普通のビジネスホテルだった。男の人は二部屋を取ると、片方の鍵を私に手渡して言った。

「明日の朝、九時くらいに部屋に行くよ」

どんな意図があるにせよ、眠る場所があるのは悪いことじゃない。私は黙って頷いて、鍵の番号の部屋に向かった。

部屋は神経質なまでに清潔で、ベッドはきちんと角が立っていた。ゆっくりとシャワーを浴びて、ドライヤーで髪を乾かして、バスルームで眠る。静かな夜だった。時間はあっという間に過ぎて、朝が訪れた。

ドアをノックされ、開く。昨夜の男の人が立っていた。
「多少は顔色が良くなったね」

待ち合わせの場所は、ホテルだった。やましいことをするのではなく、ちゃんとした使い方をされるホテル。ラウンジに入り、コーヒートを注文する。窓の外に見えるのは、歩く人たちの姿。流れている音楽は、流行歌をピアノアレンジしたもの。特別なところのない、清潔で実直

なだけ売りのホテルなんだと思った。買ったばかりの服は、体にまだ馴染んでいない。袖口を時々引っ張って、何か違和感を誤魔化す。カップを口に運ぶ度に、背中の辺りが引っ張られる気がした。

男の人が現れたのは、通りを歩き交う人の種類が変わった頃だった。家路に就く人から、夜の街へと繰り出す人へと変わった頃。

何も言われずに食事を注文され、また

そう言われたけれど、どう答えて良いか分からなかった。ので微笑んで返しておいた。

男の人は部屋の中に入って来て、立ったまま煙草に火をつけた。ゆっくりと部屋に煙の匂いが満ちる。私はベッドの縁に腰を下ろして、何か言われるのを待っていた。彼は何も言わずに煙草を一本吸い終えてしまった。

「外で話そう」

それだけ言うと、振り返らずに部屋を出て行こうとする。その背中を、いつもより軽い足取りで追いかけた。

連れて行かれたのは喫茶店。大通りを少し逸れた辺りにある、宝石の名前の喫茶店だった。彼はモーニングセットを二人分頼むと、また煙草に火をつけた。そう言えば昨夜は吸っていなかったな、とその時になってやっとな気がした。

運ばれてきたセットメニューを、時間

無言のまま食べ終えた。

何故か思い出したのは、小学校の頃に飼われていたウサギのことだった。校庭の端に大きな檻があって、その中にウサギがいた。家に帰るのが嫌なときは、時々檻の前に座ってウサギを眺めていた。ウサギは私を気にせず、黙々と与えられたエサを口に運んでいた。

「部屋に行こう」
そう言われて、手を取られた。驚きはあったけれど、意外なことではないなとも思った。遅いか早いか、回り道をするかしないかだけの違い。結局はいつもと同じことの繰り返しなんだと思った。
連れて行かれた部屋は、普通のツインルームだった。

お酒を飲みたいと思ったけれど、ルームサービスを頼んで良いものかどうか分からなかった。部屋のパットでインスタントのコーヒートを淹れた。男の人は

シャワーを浴びている。

有線で流れているのは、私たちよりも前の世代の曲。世界的に有名な四人の作った曲。民族音楽のような楽器の調べが、ゆっくりと聴こえてくる。

落ち着かない気持ちで誤魔化そうとして、ゆっくりと服を脱いだ。バスローブに袖を通して、脱いだ服をハンガーにかける。二杯目のコーヒーを飲み終えても、落ち着かないままだった。男の人はまだシャワーを浴びている。

どうしてここにいらっしゃるんだろう。なんでもこんなことになっているんだろう。私はどうしたかったんだろう。

何ヶ月か振りにはっきりと覚醒している意識は、私自身に問いかける。

答えなんて分からないし、答えがあるとも思えない。けれど、頭は考えるのを止めようと思わない。

男の人が浴室から出てくるまで、ひとりきりでそんな苦しさに向き合うことに

なるから、君自身も減茶苦茶になる。それをただ繰り返して来ただけだろうね」

ゆっくりと、諭すような口調。穏やかで、沁み込むような声。話す口振りそのものは優しいのに、言っている言葉はこれ以上なく厳しくて……。

否定することも、肯定することも出来なかった。

男の人はしばらく黙ったまま、煙草を吸っていた。私が何も言えないのを悟ると、立ち上がって服を着始めてしまった。その仕草と背中を、じっと眺めるしかなかった。

ひとり残された部屋。ひとりで寝るには広すぎる部屋と、広すぎるベッド。大きなベッドの端で小さく丸くなって、私はじっと目を閉じていた。

違う。そうじゃない。私が悪かった訳じゃない。私は何もなかった。

でも、そうかもしれない。私が何もし

なってしまった。

薄暗い部屋の中。一通りのことが済んだ後の部屋の中。同じベッドで、並んで天井を眺めていた。

男の人は、驚くほどに寡黙だった。何も問われなかったし、何かを求められもしなかった。ただ体を重ね合っただけ。そんな淡白な感じがした。

疲れているはずなのに、私の意識は途切れそうもなかった。眠るにはまだ早いと、無意識がそう言っているようだった。

男の人の腕が、私の頭を抱きかかえる。そのまま自然な仕草で、胸元にまで抱き寄せられた。心臓の音が、はっきりと聞こえて……。

気がつけば――

私は、自分の今までのことを全て、話してしまっていた。

話の途中、男の人は煙草を何本か吸い、

なくても、私の周りは簡単に変わってしまふ。

嘘も本当も、簡単に作り変えられてしまふ。

嫌になった。苦しくなった。哀しくなった。悔しくなった。

何が悪いのか、初めから決まり切っていたのだとしたら。

私が悪いのだと、幼いあの頃から分かり切っていたのだとしたら。

もう、取り返せない。

私を取り巻く世界が、どうしようもなく減茶苦茶に思えた。間違っているように思えた。悪くないのに、悪い。何もしていないのに、何かをしている。

それなら――

そう。それなら、逆さまにしてしまえば良いのだと、やっと私は分かったのだった。

コーヒーを私にも淹れてくれた。スーツのポケットから爪切りを取り出して、爪を切り揃えていた。

長い長い話になってしまったけれど、男の人はそれでも最後まで聞いてくれた。決して真剣な態度ではなかったけれど。

そして、男の人は一言口にした。「それは、君が男を減茶苦茶にするんだよ」

言われて、意味が分からず、呆けてしまった。

半分だけ口を開いたまま、どんな表情を浮かべたら良いのかも分からないまま、男の人を見詰める。

「君に関わった男は、減茶苦茶になる。そういうことだと思っ」

私じゃなく、男が減茶苦茶になる。

頭の中で何度繰り返しても、意味が分からなかった。

「君が男をおかしくする。男がおかしく

10. 空を舞う

目を覚ました私は、真っ直ぐに駅へと向かった。コインロッカーから荷物を取り出して、背負う。

濁った朝だった。この街の、いつも通りの朝。良いとも悪いとも思わない。名残惜しくもないし、清々するという感じでもない。

ただ、もういいと思っていた。構わないと思っていた。

ごみ捨て場にバッグを投げ込むと、鴉が飛んで逃げた。

非常階段を上る。かん、かん、と均一な足音が、妙に響いて聞こえた。

赤い錆止めを塗られただけの、簡素な非常階段。ゆっくりでもなく、足早にでもなく、昇り続ける。

扉の鍵が壊れているのは知っていた。

私は一步、踏み出した。

ノブを半分だけ回して二、三度押すと、扉は開いた。風が頬に当たって、目の前には灰色の世界。色彩の死んだ光景。

空は曇っていた。空気は肌にまとわりつくようだった。見えるのは、ビルとビルとビル。コンクリートの箱のあちこちに、華美な色使いの看板がかかっている。嫌悪感はなかった。憧憬もなかった。何もないまま、景色を眺める。

足はゆっくりと進み、フェンスを乗り越える。

何かを考えるべきだろうか。何かを叫ぶべきだろうか。何かを思うべきだろうか。

誰かに、伝えるべきだろうか。

今更になってそんなことばかりが脳裏を過ぎる。

脳裏を過ぎただけで、それだけで――

それ以上の何かはなかった。

回る。くるくると、回っている。逆さまになって、景色が流れて、回っている。

でも、私は変わらない。

音がノイズになって、映る景色が線になって――

痛みとも衝撃ともつかないものが通り抜けて、黒くなった。

変われなかった私。変われないままだった私。

でも――

こうして、世界は逆さまになった。

こんなにも簡単に。

俺だし、床で寝るのも嫌だしさ。

はっきり覚えてる。スタイルも良いし、顔も整ってる。そんな美人がひとりり酒飲んでたら声くらいかけるだろ？

で、彼女はついて来た。そりゃびっくりしたよ。簡単すぎてさ。ふらふらって感じで、俺の後ろをついて来るんだぜ？

乗り気には見えなかったし、でも嫌そうにも見えなくてさ。自棄になってる、って感じでもなかったと思うよ。

適当なホテルに入って、シャワー浴びて、聞いてみたんだ。何でこんな簡単について来たんだ？ ってさ。そしたら彼女、少し考えてっから、「さあ」って答えたんだ。自分でも分からない、って感じでさ。

気味が悪い？ いや、そうは思わなかったよ。綺麗な女は少しくらい変わっても許容範囲だし。逆に面白いだろ？

でもさ、何か俺が白けちまって。結局何もしないで並んで寝たんだよ。……それくらいは仕方ないだろ。金払ったのは

俺が彼女を引っ掛けたのは、三ヶ月近く前のことだったと思うよ。盆休みが過ぎて、お決まりの花火大会が終わった後のことだったから。

その日は仕事で下らないミスをして、運悪くそれで長々と説教されて、気分がくさくさしてたんだな。いつもだったらツレをつかまえて憂さを晴らすんだけど、そういう日に限って誰も捕まらなくてさ。しょうがないから、ひとりで馴染みの店に行こうと思ってた。で、またまた運の悪いことに、臨時休業の札がかかって。仕方ないから適当に目に止まった店に入ることにしたんだよ。

初めて入る店ってのは、勝手が分からない。とりあえず酒でも飲んで気分を解そうと思ってたら、カウンター席の端っこに彼女が座ってた。とんでもない美人で、息が止まりそうになったね。今でも

うに酒飲んだ。何となく声かけそびれてその日は帰ったんだけど、やっぱり気になる。で、次の週末に思い切って声かけたんだよ。俺のこと覚えてるか？ っ

てさ。

彼女は頷いたけど、あれは嘘だったと思う。今になって考えるとね。けど、その時の俺は舞い上がってさ、彼女を連れて店を出たんだよ。

普通にデートとかする関係から始めたって、俺がそう思ったらおかしいか？

でも、本当にそう思ったんだよ。だから車で海に行ったんだ。夜の砂浜で花火をするなんて、結構気が利いてると思っ

たんだ。

夜の内に海には着いたんだけど、夜の海って不気味でさ。花火しようと思ったけど、去年のだったから温気ってて駄目で。真っ暗な中で二人並んで彼の音聞いてたよ。ロマンチックって感じよりも、世界が終わりそうな感じだったな。本当

に不気味だった。

それで、何だったっけ、あの……そう、夜光虫。波打ち際に少しだけ夜光虫がいてさ。彼女が座り込んでじっとそれ見て、なんか綺麗でさ。覗き込むようにして、キスした。それが俺の精一杯だったね。朝方帰って来て、次に逢う約束もしないで別れちゃった。疲れてて眠かったし、舞い上がってたってのもある。何せ、あんな美人にキス出来たんだからさ。それっきり、彼女には逢えなかったよ。二度とさ。

一昨日、だったよな？ 確か。

彼女がその……飛び降りた、って新聞に載ってたの。

名前？ ああ、あの店の店員に聞いたんだ。その店員も、本人から直接じゃなく、別の客から聞いたって言ったな。

——それで、俺、彼女が飛び降りたってビルに行ってみたんだよ。

非常階段には鉄のフェンスが出来てて、

南京錠がかけられてた。あれじゃ非常時に使えねえよな。あのビル、管理人が意外と善人でさ。花を添えに来たって言ったら鍵開けてくれたよ。屋上、風が強かったな。フェンスは全部真新しくなって、乗り越えられないような高さだった。天気の良い日だったよ。相変わらずの白い青空、ってヤツだけど。

そしたらさ、何だか悲しくなってきたさ。ああ、彼女もこんな景色を見たのかなーって思ったら、やりきれなくなってきたさ。花持ってしばらくぼけっと立ち尽くしちゃって。

地面見下ろしたら、歩いてる人の頭が見えて。小さくてさ。痛かったと思うぜ。

あんな高さから飛び降りたんだから。で、花置いて管理人と階段下りながらさ、思ったんだよ。

彼女は飛び降りて死んだけど、もしも

頭から落ちたんだとしたら——

もしかして、それは——
回りながら、踊りながら、昇って行ったように、思えたんじゃないだろうか？

了

